

宮川正雄さん

平川浩正(物理)

私が物理学教室の金工室に出入するようになったのは、学部の3年(旧制)の特別実験を始めた頃である。金工室は規律厳正で、工作の手順を教えてもらうにも、おそろおそろおうかがいを立てたものであるが、宮川さんはいつも親切に相談にのり、大きな声で返事をしてこころよく工具の貸出しに応じてくれた。宮川さんは昭和14年の春に日給1円の「職工」として物理教室に入った。採用のときの面接は工場掛の小穴純先生がされた由である。そのころの金工室は、現在とほぼ同じく理学部1号館の14~28号室の廊下をはさむ一画を占め、7名の人員を擁していた。戦争が始まり、教室の一部は長野県諏訪に疎開したが、宮川さんは金工室の一員として本郷の職場を守り続け、その間に宮永町の自宅を空襲で失ってしまった。終戦になって、疎開先からの引上げと戦地からの復員で教室はもとの活気を取戻したが、住む所がなくて研究室に寝泊りする人もあり、1号館はふくれ上ってはちきれんばかりになった。私は昭和23年に入学したが、初めて見る金工室の光景はあまりパツとしなかった。カウンター方式といって、へやごとに大きなモーターが1台ずつ天井に取付けてあり、その動力を長いシャフトで伝えて行って、革のベルトを介してそれぞれの工作機械をまわす仕掛けになっている。悲しいことに、一寸へ

まをして負荷をかけすぎると、このベルトがはずれて旋盤が止ってしまうのである。当時の学生は、勤労働員で中学・高校の時代に働いた経験がある。私も1年余り日立製作所の工場で零式戦闘機の主脚を作った。当時としては最新のスイッチひとつで自由に動く旋盤の並んだ工場にくらべ、大学の金工室はいかにも見劣りがした。そのころは工作を外部に注文することは少く、実験に必要なものはなんでも教室の金工室で作るのが建前で、金工室はいつも混み合っており、宮繕関係の窓の金具の修理やドアのYale錠の暗証の差換まで、工場のレパートリーのうちであった。その後、野上耀三・三須明・鈴木秀次の諸先生を経て現在の山本祐靖先生に工場掛が引継がれるうちに、金工室の近代化が進んで、年輪をかさねた機械はすべて置換えられ、控室には風呂桶のかわりにテレビがおかれるようになった。

物理教室に金工室があることの意義は大きい。作りたいものがあったとしても、図面だけでは表現することができず外注に頼ることのできない要点というものがある。新しい実験のための装置を手探りで試作して行くとき、設計と工作が密接に協力できるのは換えがたい利点である。宮川さんの定年までの46年になんなんとする仕事は、学問に対するこのような貴重な助力に捧げられているが、こ

の伝統はこれからも生かされるであろう。いばらず、かざらない宮川さんの人柄は、皆の印象にの

こされている。第二の人生の門出を祝うこと切なるものがある。